

パリ勉学事情

池上俊一

人も知るアナル学派の根城、Ecole des Hautes Etudes en Sciences Socialesで1986年9月から二年間、ジャック・ル＝ゴフ、ジャン＝クロード・シュミット両氏らの所属する西洋中世歴史人類学グループの一員として学ぶことができたのは、私にとってまたとない貴重な体験であった。Raspail 大通りとCherche-Midi通りの角に、周囲の建物と不自然に調和した一際モダンな校舎を初めて目にした時の感動は、それが監獄を取り壊して建てられたというピエール・リシェ氏の話聞くに及んで倍加したが、それはともかくとして、ここには、多数の研究室・教室のほか、CNRSとMaison de l'Hommeの図書室・事務室などが同居している。

アナルの連中が次から次へと新しい対象に挑んでいるのは先刻承知していたが、私の滞在中には、性や死の歴史・子供の歴史などは第一線を退き、「歴史図像学」と「感性の歴史学」、そして「王権や国家の象徴史」がとりわけ脚光を浴びているような印象を受けた。またゼミで特徴的なのは、複数の教師が担当する共同ゼミが多いことで、しかも歴史家ばかりか美術史・文学理論・民俗学・人類学など隣接諸科学の専門家とも組んで行われ、まことに啓発的であった。フランスの学者の議論好きは呆れるほどで、見世物としても非常に面白いものであった。EHESSには、新しがり屋の傍らに、より伝統的な実証主義歴史学に近い家族史研究者がいる。そうした一人クラピッシュ女史のゼミでは、毎週新たに、写本をトランスクリプトしたもののコピーの分厚い束が配られ、そこから14・15世紀フィレンツェのマニャーティ家系の連続と断絶のメカニズムを「市民権」「紋章」「庶子」「寡婦」「カルチエ」などに着目して読み取ってゆく。その根気と手腕に舌を巻くとともに、イタリアの都市史や家族史を手掛けるには、文書館にこ

もるしかないことが分かって、出鼻をくじかれたのもあった。因みに、本ゼミ出席者十数人のうち、半数はイタリア人であり、イタリアに優れた家族史研究者のいないことも伺えた。

パレオグラフィーは、EHESS では学べないので、私は、ソルボンヌ構内にあるEcole Pratique des Hautes Etudesの第4セクションで手ほどきを受けた。ほかに、Ecole des Chartes やEcole Normale Supérieureでも無料で習うことができる。とびきり優秀な女子学生や自称地域史家、あるいは趣味で来ている老人達とともに、デュフル氏のパレオグラフィーは、苦しくも楽しい授業であった。

授業のほかは、BNに日参した。爆弾騒ぎやスト続きで、円滑に運営されることのほうがまれなBNではあったが、写本の宝庫であるとともに、フランス語の本・雑誌は完璧に揃っている訳だから、ここに通わなければまともな勉強はできないと思ってしまうのも無理はない。さらに閲覧室には、誰にでもすぐ見られるよう主要な辞書・事典・参考書類のほか、Acta Sanctorum、Migne、MGH、Muratori、SHF その他の史料集が所狭しと取り揃えてあり、それは、それらの史料をたとえ所蔵していても、たいていは書庫の奥深くに眠っているか、時には貴重書扱いになっている日本の図書館との決定的違いであろう。BNの閲覧室を散策して気の向くままにこれらの参考書や史料集を手にとってパラバラめくって思いがけない発見をし、新たな視界が開けたことが幾度あったであろう。Migne に数巻の独立した便利至極な索引があるのを発見したのも、こうした散策の成果の一つであった。とにかくヨーロッパの研究者と日本の西洋史研究者とでは、研究以前のベースが全然違うことをこの二年間いやというほど思い知らされた。

それに何ととっても、雰囲気の違いはどうしようもない。パリで満身に漲っていた覇気も、せせこましい東京に吸い取られて今や萎縮してしまった。マロニエの綿毛の舞うセーヌ河畔やギリシャ＝サンドウィッチをかじりながらよく歩いたカルチエ＝ラタンを眼前に彷彿とさせながら、今度いつパリに戻れるのだろうかと思ひ悩む毎日である。